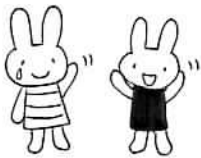


# 小麦通信



発行：NPO 法人 北海道食の自給ネットワーク  
〒065-0015 札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内  
TEL：090-2818-5502 FAX：011-789-8890



## 小麦トラストにご参加くださった みなさんへ



事務局長 大熊 久美子

会員のみなさん、今まで小麦トラストにご参加いただき本当にありがとうございました。

今回の製品及び通信をもって、10年間の小麦トラストの活動は終了いたします。



生産者と消費者双方が支え合う意思を持ち、農業と食を守り、食料自給力を上げていく事をめざして、2002年に小麦トラストはスタートしました。その前年、生産者はおろか産地の特定もできない流通状況の中、生産者と産地を特定した小麦を自主流通させてもらえるよう、ホクレンに許可をお願いするところから活動は始まりました。その後、トラストに参加してくれる生産者、JA、メーカー各社を探し、消費者に呼びかけ、市役所、改良普及センター、農業試験場などの協力を得てトラストを開始。活動の輪は少しずつ広がって行きました。



小麦トラストの特徴は、生産者も消費者も加工業者も食と農を支え合う対等なパートナーとしてファームレターや小麦通信などで紹介し、産地見学交流ツアーや意見交換会、パン作り講習会などで直接会って交流を重ねていくことです。普段顔を合わせる事の無い三者がそれぞれの枠を超えて顔の見える関係を築いたとき、それまでの意識に変化が生まれました。

消費者が産地ツアーで畑に来てくれて、自分が答えに詰まる程熱心に質問をしてくれた。こんなに関心を持っていてくれたのかと驚くと同時にこの人たちの為に良い小麦を作らなくてはと改めて思った」とは多くの生産者が語ってくれた言葉です。ある生産者は、自分の畑に初めて消費者が来てブログにも載せてくれた上、後日また訪れてくれた事が「心底嬉しかった」と話してくれました。「消費者にしっかり向き合いたい

と初めて思った」と。

こうした変化は消費者側にも多くあり「生産者に会ってからは畑の天気が気になるようになった」「生産者の顔と畑を思い出しながら食べるパンは本当に豊かな味がする」「家族みんなでファームレターを読み、生産者の努力に感謝している」等々の回答に加え「これからも生産者の作ったものを食べ続けたい」と多くの消費者が明確な意思を伝えるようになりました。

トラストの製品を食べ、情報を共有し、互いの交流の中から生まれた双方の意識の変化は、国の制度などでは決して生まれなかったものであり、民間の活動だからこそできた事だと改めて思います。農業や食を守るために、民間活動でもこういった事業を立ち上げ継続する事ができると、社会に向けて発信することもできました。



しかし、小麦トラストのような活動だけで食や農業の問題が解決する訳では勿論ありません。小麦は国からの助成制度が無ければ経済的に成り立たない作物であり、その政策もこの10年の間に麦作経営安定資金→品目横断→戸別補償制度と変遷しています。それに伴い地域の生産体制や生産者個々の事情も変わりました。

生産者の生活基盤を守る国や自治体の政策と、生産者・消費者による作り支え食べ支えが合わさって初めて本当に強い農業が実現できると思います。そのためにも、私たちは農業を取り巻く情勢や政策にしっかりと目を向けていかなければなりません。

小麦トラストは終了しますが、みなさんがこれからもそれぞれに活動を続け、またどこかでお会いできる事を心から願っています。



## 生産者の 想い



## 小麦トラストに参加して

江別市篠津 農業 萩原 英樹

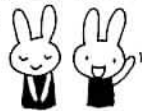
「今度小麦トラストっていうのをハルユタカでやるんだけど、お前参加してみない？」  
そんなことを、当時自給ネットに参加していたM先輩に言われ、全く軽い気持ちで生産者の一人として加わったのですが、10年も続くとは思いませんでした。

その頃、ハルユタカは受難続きで生産意欲は減退していました。一方で「幻の小麦」としてメディアに登場し始めたころでもありました。作れば必ず売れるけれど所得の上がらない本当に私たち生産者にとって悩ましい品種だったのはまがいありません。

ちょうどそのような時に始まったのが小麦トラストでした。スタッフとして沢山の小麦に関わっている方とお話出来たことは、何よりの財産になりました。そして、そのおかげでハルユタカをやめられなくなりました(笑)

「ハルユタカにはストーリーがある」。よく江別製粉や利用されている消費者の方たちから言っていただきます。幻から復活する過程に「初冬に種をまく」という常識を覆す技術が大きく貢献しており、私もそのことだと思っていました。しかし多くの方に話を聞くうちにそれだけではないことがわかりました。ある仲卸の社長からはつぶれそうなパン屋さんがハルユタカのパンを作り始めてから行列のできる店に変わり、後継者まで出来たことを聞きました。ストーリーは生産者だけではないんです。本当にうれしかった。

年4回の宅配に詰まったストーリー。スタッフとしては赤点ぎりぎりでしたが、ファームレターや産地見学交流ツアーなどで小麦に触れ、製品でもう一度思い出すという理想的だけど大変なことを10年も出来たこと、そして会員の皆さんやお世話になった全ての皆さんに伝えたい「ありがとう、またあいましょう」



岩見沢市農政部農政課 主幹 瀬尾悦郎

「キタノカオリ」という品種が加工業者の方やご家庭に普及したのは、北海道食の自給ネットワークの小麦トラスト運動によって、現在の「キタノカオリ」をつくり上げて頂いたからと感謝しています。

JAいわみざわ産「キタノカオリ強力小麦粉」が商品化された時、サンプルと成分表を入れた紙袋を持って、飛び込みで売り込みに行きました。いざ！東京有楽町の交通会館北海道物産展へ。キタノカオリ小麦粉1kg袋を山積みにして、キタノカオリパンの試食とノートパソコンでPR用映像を流し準備完了。

ほっと同じフロアの出店業者さんを見ると、北海道内の一流業者さんばかり。「我々は場違いかな?」。2日間の物産展でのバイヤーの反応は「色が黒い小麦粉だね」「パンは美味しいね」など様々な反応で、「国内産秋播小麦の強力粉が出ました」とPRしても、一流ブランドの「ハルユタカ」の知名度が高く、「キタアカリ?」とか言われ「ジャガイモじゃないけど・・・」と。今では楽しい思い出になっています。

「トラスト=双方で支え合う」。農業者も消費者もこの気持ちがあれば、北海道農業の将来も明るいと確信しています。



## 「小麦トラスト」への農業改良普及センターの役割と感想



空知農業改良普及センター 専門普及指導員 木田 寛子

消費者の方々に生産の場を知って頂く事や、生産者が直接、消費者・加工業者の方々に自らの思いを伝え、情報交換を行う事は農業の継続に繋がる大変重要なことです。そのために、農業改良普及センターでは、農業を身近に感じてもらい、必要性を認識してもらうための食育活動等を実施しております。その機会を「小麦トラスト」活動においても支援させて頂きました。

農業者やJA、普及センターなど多くの人たちの連携と協力で成り立った「産地見学交流ツアー」では、参加した方々に普段見慣れている小麦畑をとっても感激をもって見学して頂き、農業の新たな魅力発見となりました。その後、小麦トラストでも紹介された「キタノカオリ」は、小麦サミットや麦チェン!などの開催を経て、岩見沢市内外のパン・菓子製造業者に浸透し、様々な加工品が商品化されています。

「小麦」とおした縁が今後も広がっていくことを期待しています。

## メーカーさん紹介

最終年はいつもの取材とは違い、メーカーさんご自身にトラストへの想いを書いていただきました。



### 「小麦トラスト」を終えるにあたって



シロクマ・北海食品(株) れもんベーカリー 代表取締役 荒川 伸夫(札幌市)

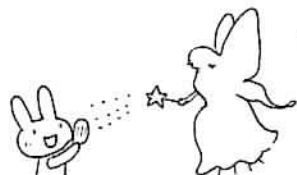
平成 14 年からスタートした小麦トラスト運動に参加させて頂き、その間、何とかトラスト製品をお届けできたことは会員の皆様方の支えがあったからこそと感謝に堪えません。ありがとうございました。

道産小麦を使っているパン作りをしている弊社にあっては、この 10 年は本当にめまぐるしいものでした。「はるゆたか」をぜいたくに使った初期から、「ホクシン」の登場によりちょっとパン作りがしにくくなり、救世主の「キタノカオリ」の出現でいっきにパン作りのモチベーションがあがり、今まさに「ゆめちから」という万能選手の出現で全国的に道産小麦でのパン作りの大きな広がりが期待されるようになりました。

また、数年前から北海道庁の「麦チェン！」運動も始まり全道的に北海道小麦に目が向けられています。北海道食の自給ネットワークの「小麦トラスト」運動は、まさに先鞭をつけた活動であったと自負できるのではないのでしょうか。

この運動を始めるにあたって担当幹事の皆様方の並大抵ではないご努力に敬意を表します。小麦生産者の皆さん、製粉メーカー、小麦粉製品のメーカーの皆さん方に根気よく意義・理念を熱く語られ、まるで同志を糾合するように束ねていく行動があったが故にここまでこれたと思います。特に平成 19 年の小麦の不作時には大変ご苦労されました。それに続く昨年までの小麦の不作の中、初期の目的の「生産者の顔が見える小麦」を使うことを貫けたことは、生産者の皆さまはじめ係わってきた方々の思いがあったからだと思います。

今後、北海道小麦を取り巻く環境は大きく変化していくと思いますが、弊社といたしましては小麦トラスト運動での学びを今後ともパン作りに生かし、北海道産小麦の良さ、おいしさを味わっていただけるよう努力して参りたいと思います。



### 小麦トラストの 10 年



(有)ティンカー・ベル 代表取締役 柏倉一敏(北見市)

「北海道食の自給ネットワーク」が発足して、半年後くらいに縁あって会員になり、2年後くらいに大熊さん、藪島さんと、当時の江別製粉の担当の女性3名で、北見までわざわざ来てくれ、とりあえず食べたり飲んだりして、盛り上がったのですが、小麦トラストの話は最初にちょこっただけで、軽く考えていたものです。

我々は、指定の小麦で製品を作れば良いわけですが、事務局やスタッフ、江別製粉さんなどは、仕組み作りと段取りなど、それこそ日本初の試みなので、たいへんな苦労があった事でしょう。

時代も地産地消や、食の安心安全など、ブーム的な煽りの中、10年間にわたり地に足のついた取り組みとして、生産者、メーカー、消費者、共に考えさせられたり、理解しあえたり、感動したり、色々な思いのなかで・・・私としては、この運動に関わったこと参加できたことがひとつの支えとなり、店のスタンスを維持する力にもなったように思います。

数年前からトラスト製品として出していたガトーオホーツク(今回の製品でもあります)は、小麦をオホーツク産のものに置き換えてすべてオホーツク産の材料で出来たバターケーキとして、いよいよ製品化する予定です。トラストの皆さんの評価をいただけた事が大きな力になっています。

日本の食の状況は「自給ネットワーク」が設立された頃より、むしろ先の見えない混沌とした状況になっているように思われます。自分の家族、子供や孫が普通に暮らしていける世の中になるように、原発や TPP の問題も見つけないフリをするのではなく、しっかり向き合い勉強して声を上げなくてはならない・・・と、自らを戒めるこのごろです。

10 年間、活動を支えてくれた皆さん、本当にご苦労様でした。

## 小麦トラスト最後の意見交換会を実施しました



小麦トラストスタッフ 外所 裕子

2011年3月11日、ゲストにメノブレッジ 長沼の荒谷明子さんをお迎えして、最後の小麦トラスト意見交換会を実施しました。当日は消費者、生産者、メーカーの方々総勢23名が参加し、これまでのトラストの思い出やこれからの農業の在り方について、時間が足りなくなるほど活発に意見が飛び交いました。



まず大熊さんより、3月11日のこの日、こういった会を開くのだから、放射能やTPPなどを含めてこれからの日本の食の在り方について考える会にしたい、とオープニングの挨拶があり、シロクマ・北海食品(株)代表取締役 荒川氏から説明いただいたランチボックスを美味しく食べながら、消費者、生産者、メーカーそれぞれが今までの小麦トラストの活動を振り返った感想をざっくばらんに話しました。

メーカーからは「参加を決めたのは小麦トラストと気持ち、方針が一緒だったから」「スタート時、新しい取り組みなので色々大変なことがあり、苦労も多かったけれどその分鍛えられ、自分たちの力にもなった。」「小麦は10年前に比べると品質が格段に良くなり製品を作りやすくなった。」「生産者からは「10年も小麦トラストが続いたのは単に製品が届く、というのではなく、消費者が小麦を取り巻く問題に興味を持って参加したからだと思う。」「お米と違い、小麦は自家製粉が難しいため、自分で作った小麦を食べたことがなかったが、自分の小麦を食べられたのが良かった。」「出荷してしまえば自分の小麦がどんな風にどんな人に食べられたのか分からなかったが、トラストでは消費者と交流できたのが良かった。消費者には小麦を育てる場所の空気ごと感じて食べてほしい。」「消費者からは、「実際に小麦の畑を見て、生産者から話を聞いたのが良かった。」「安い物ありきではなく、これからはもっと踏み込んで物を選んでいくべき。」などの意見が出た他、「道産小麦で作られたパンを扱っている店がどこにあるか分からない。これからどうやって手に入れればいいのかと思う。」という声には、「単にこの店では扱っていない、ではなく、お店で店員さんにこういうものを扱って欲しいと伝える。消費者として声をあげていくことで変わっていくことも沢山あるから、声をあげていくことが大事」と議論が深まりました。



休憩を挟んだ後、まず酪農学園大学 教授 中原氏から、「TPPはアメリカでも自動車業界や小さな企業は反対していて、賛成しているのは輸出能力のある大きな農家や大企業。TPP はいわば国民のためのものではなく、ある特定の大企業のためのもの。特にISD条項(毒素条項)は自分の国のルールを自分たちで決められない、消費者がみんなで作り上げて来たものを他の国の企業に壊されてしまう、という恐ろしい規定で、TPPは生産者だけでなく、消費者にとっても大きな問題である。」とTPPの問題について提起していただきました。続いてメノブレッジ長沼の荒谷さんからは、「1991年 カナダに留学していたときNAFTA(北

米自由貿易協定)が締結された後で、カナダの製粉業者はすべてアメリカの業者に買収され、生産者は小麦価格の暴落で次々と離農していた。そんな状況の中私が勤めていたパン屋は、机の上に乗るくらいの小さな小麦の製粉機を購入して、一般の4倍の価格で生産者から小麦を買い取りパンを作っていたが、それでも小麦の価格はアメリカの会社から買うより安かった。地域でお金を使うということはその瞬間は割高に思えても、そのお金は平均6回も循環してから地元を離れることを考えると、自分を含めて地域を潤すことになる。」と話し、ご自身がメノブレッジ長沼で携わっているCSA(地域で支えあう農業)という産消連携活動と、それが地域に与えるメリット(生産者は頑張って作ったものを食べてもらえ、食べてもらう人の顔を見ると元氣とやる気が出る。消費者も畑のことを農家と同じくらい考えてくれる。地域の交流も生まれる。)について説明していただき、TPPに対抗する農業の形を提案いただきました。その後、参加者全員でそのことを含め日本の農業について色々議論しているうちに終了の時間となりました。大熊さんが「10年でべ1500人が参加してくれた。その後ろには家族の広がりがあるから、それ以上の方が小麦トラストの製品を食べ、通信を読んでくれたことになる。これは道産小麦を取り巻く状況を変える大きな力になった。」「一人一人が問題に関心を持ち、自分の意見を持つことがなによりも大切。自分たちは強い意志をもって選択をし、声を上げていかなければならない。」と締めくくり、最後の意見交換会は盛況のうちに終了しました。

★トラストへのご意見ご感想をお寄せください。 FAX011-789-8890 Eメールinfo@jikyuu.net



(イラスト:菊地 よう子)